

蒲 原 地 区

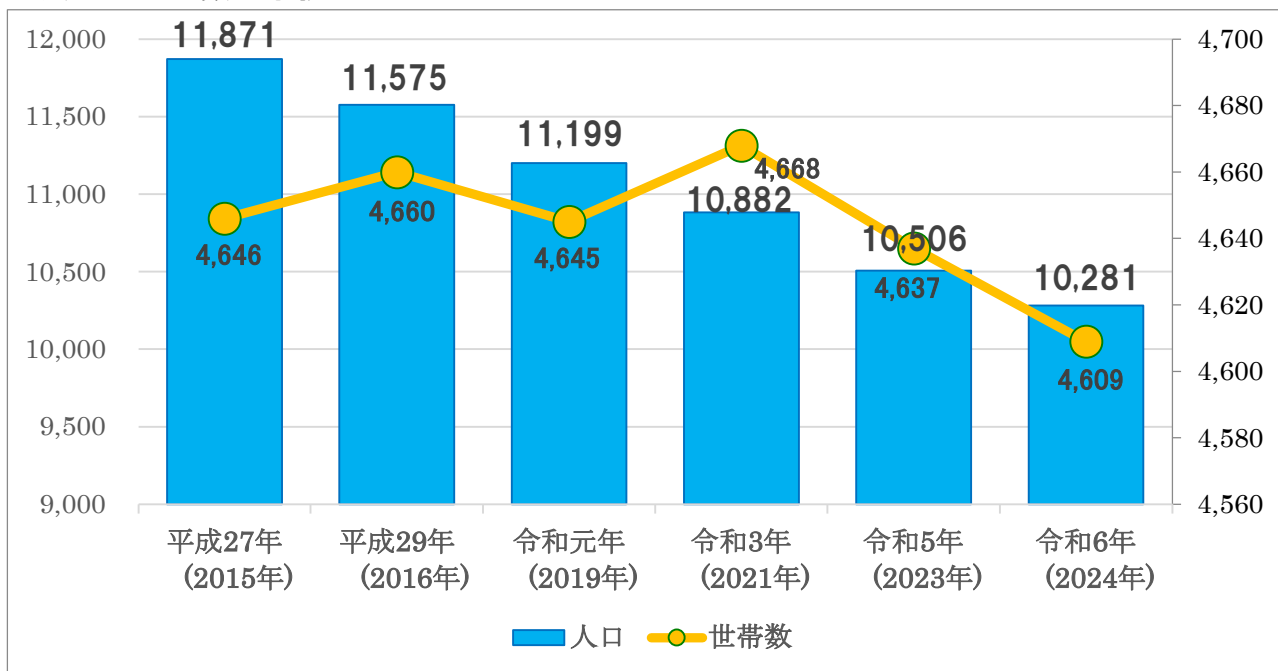
カ ル テ

データについて

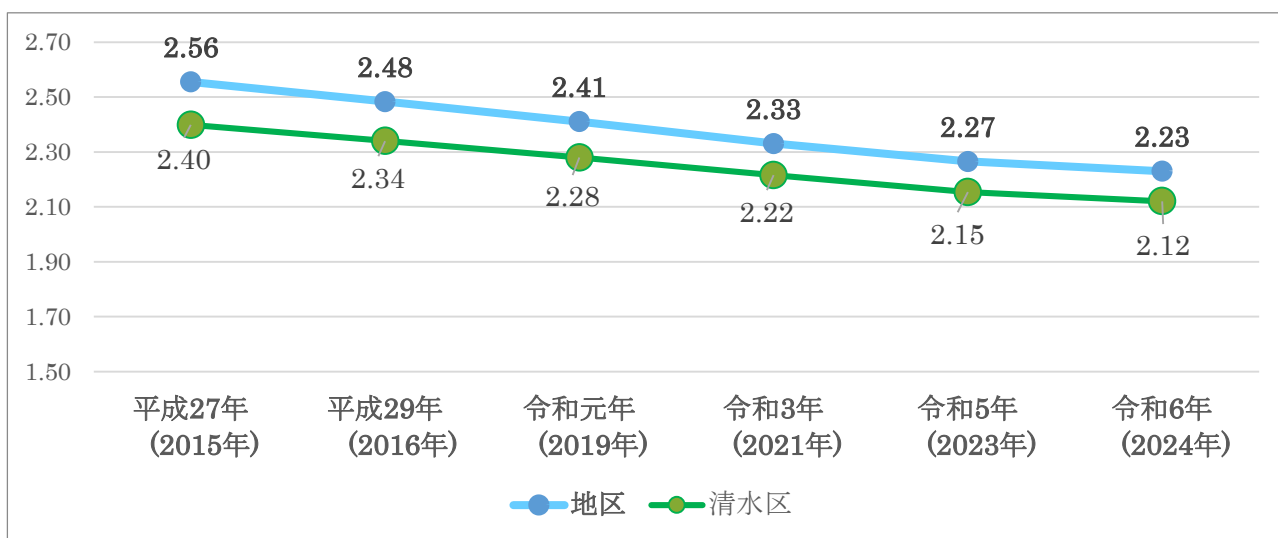
- ・カルテは住民基本台帳と自治会加入統計を利用しています。
- ・住民基本台帳は各年の 3 月 31 日の数値、自治会加入数は各年の 4 月 1 日の数値です。
- ・町名は住民基本台帳を採用しているので、自治会名と一部異なる場合があります。

蒲原地区の人口特性 令和 6 年 3 月 10,281 人 4,609 世帯 2.23 人/世帯

●人口・世帯数の推移



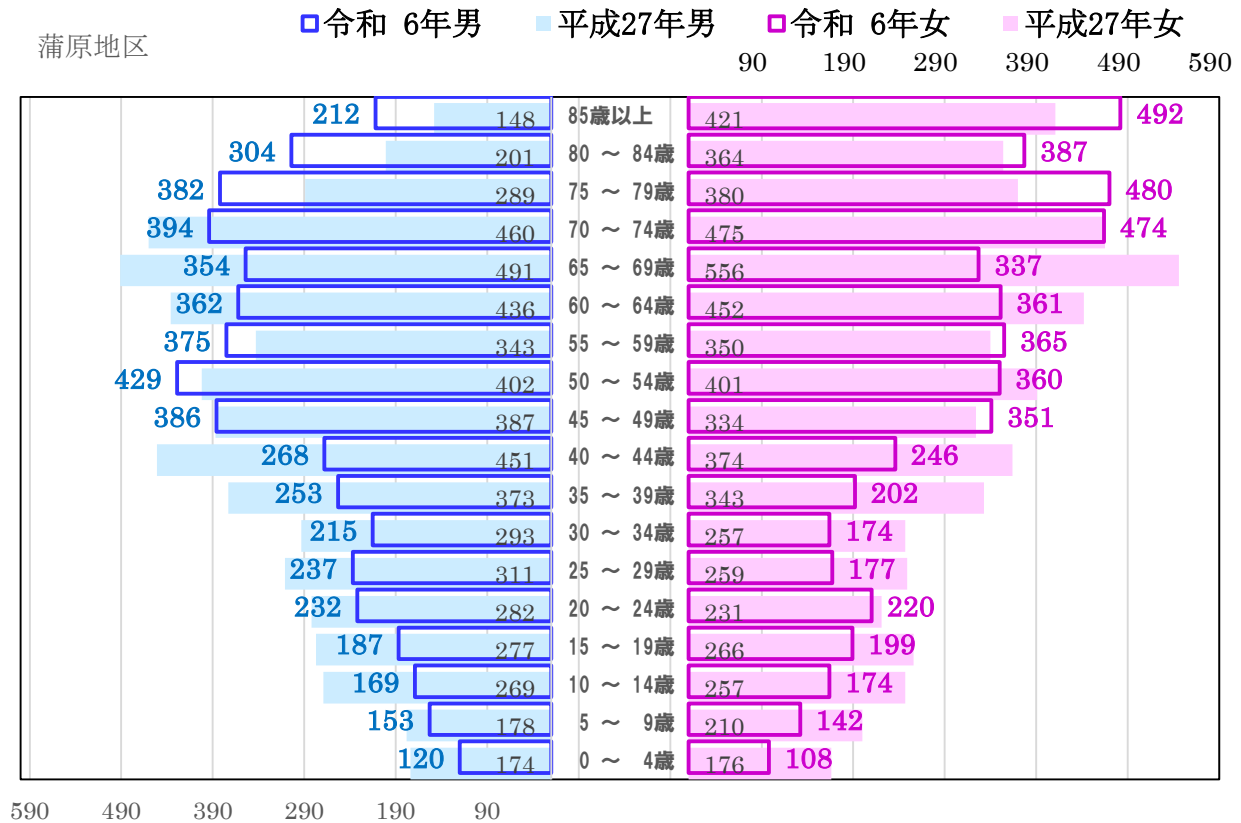
●一世帯当たりの人口推移



●65 歳以上の高齢者を支える生産年齢層 (15-64 歳)

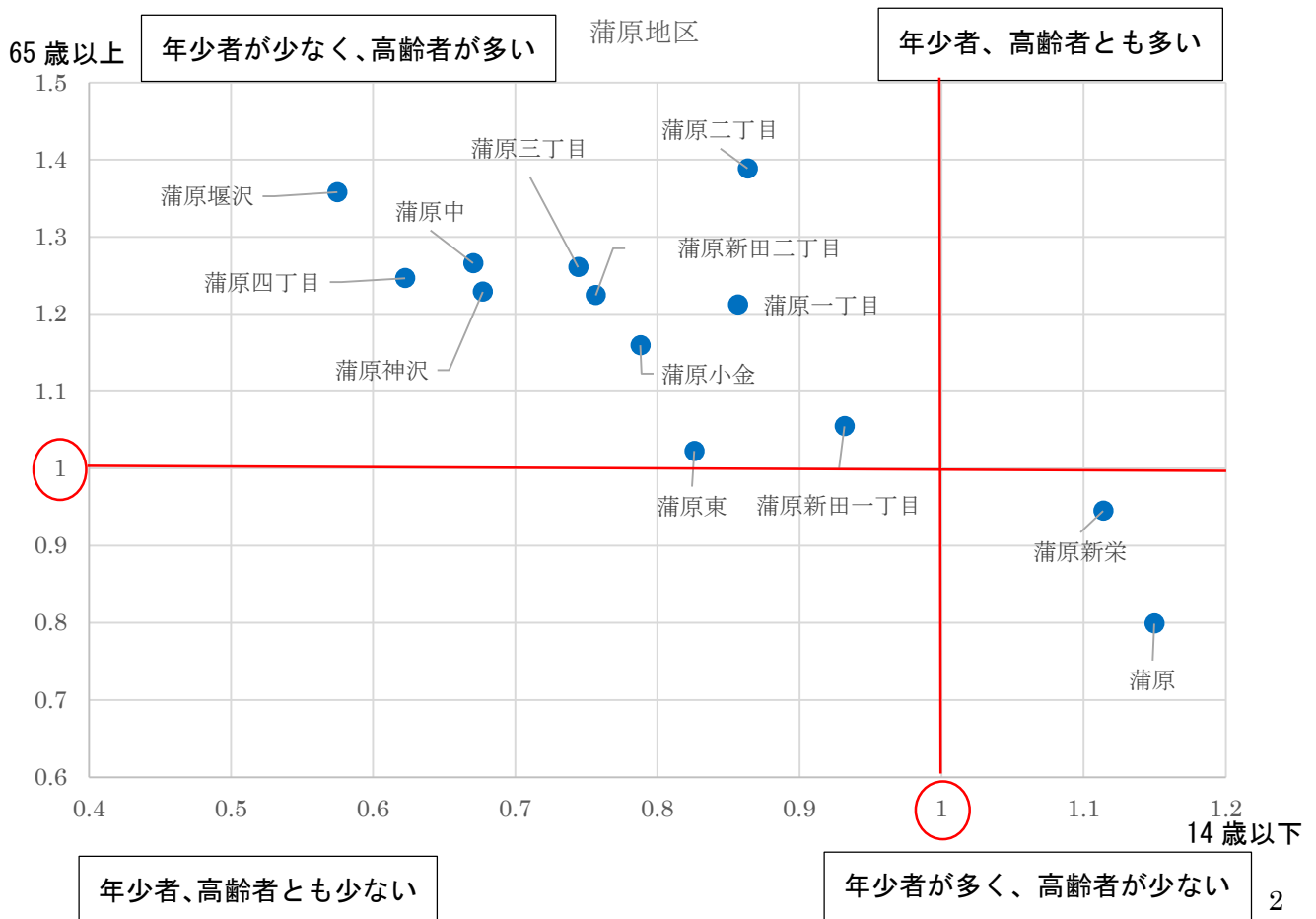
区 分	平成 27 年 (2015 年)	令和 6 年 (2024 年)
地 区	 1.80人	 1.47人
静岡市	2.16 人	1.87 人
清水区	1.98 人	1.70 人

●人口ピラミッド【平成 27 年（2015 年）と令和 6 年（2024 年）の 5 歳階級別男女別構成】



●町別の 14 歳以下と 65 歳以上の割合分布（清水区の平均値を 1 とした場合）

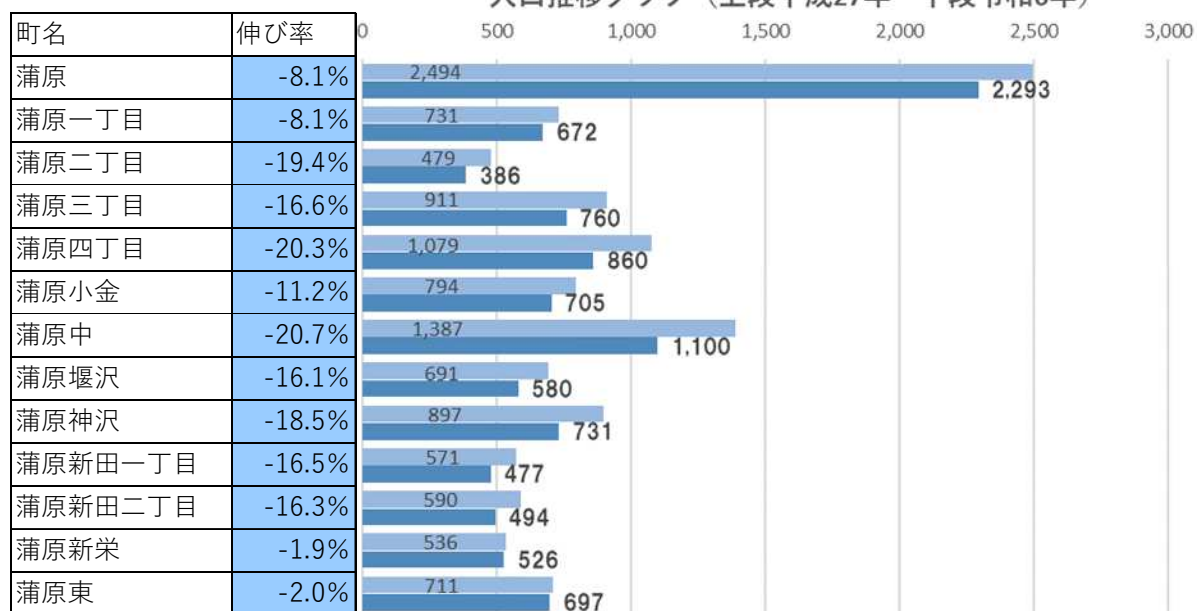
※年少者(14 歳以下)高齢者(65 歳以上)



●町別の伸び率と人口推移

【平成27年（2015年）と令和6年（2024年）の比較】

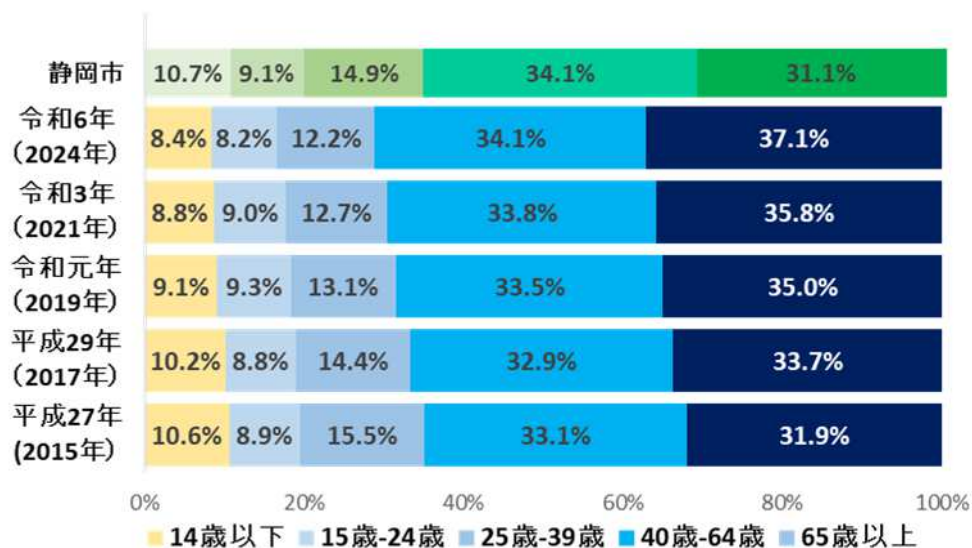
人口推移グラフ（上段平成27年 下段令和6年）



		人 口	
		平成 27 年 (2015 年)	令和 6 年 (2024 年)
蒲原地区	-13.4%	11,871	10,281
静岡市	-5.3%	713,564	675,610

●町別人口区分別割合

・年齢5区分別人口割合の推移



※15-24 歳は高校から社会人(大学修士課程含む) 25-39 歳は社会人(大学博士課程含む)

・令和6年人口3区分別：

市の割合より

青字 14 歳以下の割合が低い場合

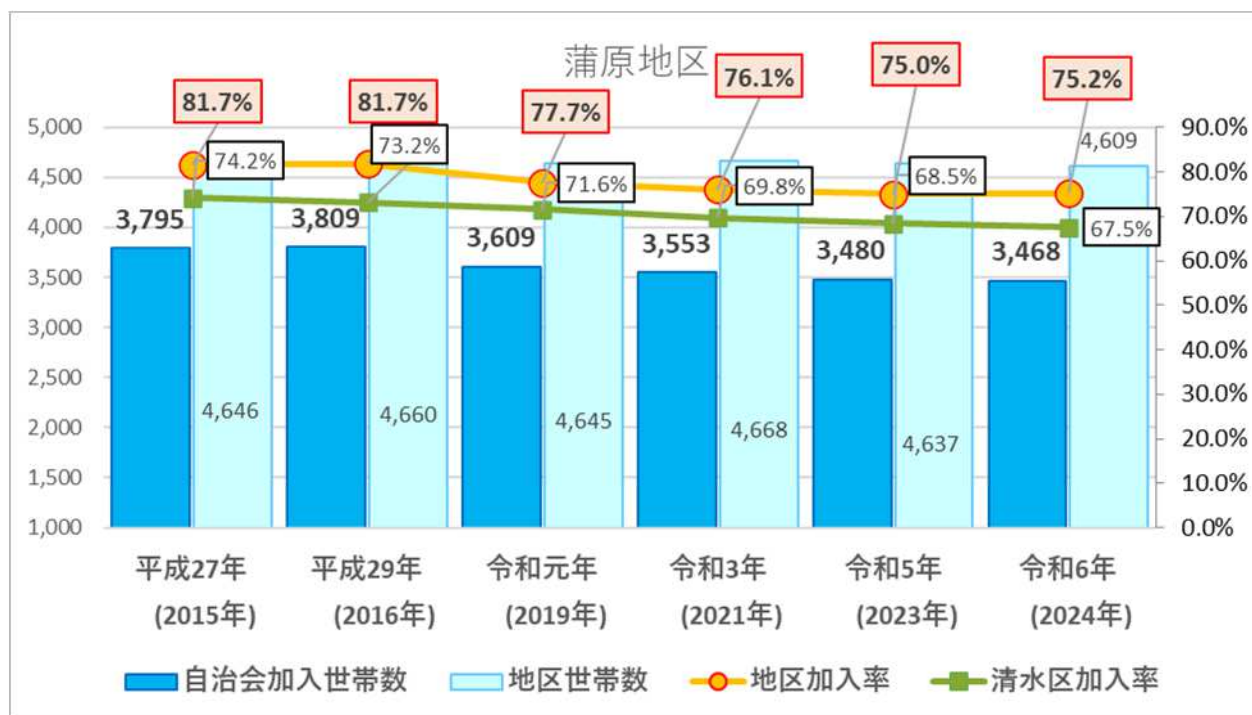
赤字 65 歳以上、75 歳以上の割合が高い場合

町 名	令和6年階級別割合		
	14歳以下	65歳以上	そのうち75歳以上
蒲原	11.4%	26.7%	14.3%
蒲原一丁目	8.5%	40.5%	23.1%
蒲原二丁目	8.5%	46.4%	26.2%
蒲原三丁目	7.4%	42.1%	25.9%
蒲原四丁目	6.2%	41.6%	25.7%
蒲原小金	7.8%	38.7%	23.7%
蒲原中	6.6%	42.3%	27.2%
蒲原堰沢	5.7%	45.3%	29.3%
蒲原神沢	6.7%	41.0%	26.7%
蒲原新田一丁目	9.2%	35.2%	20.3%
蒲原新田二丁目	7.5%	40.9%	22.7%
蒲原新栄	11.0%	31.6%	16.7%
蒲原東	8.2%	34.1%	18.1%
蒲原地区	8.4%	37.1%	22.0%
清水区	9.8%	33.0%	19.3%
静岡市	10.7%	31.1%	18.0%

●自治会加入状況

令和6年

加入率	地 区	75.2%	加入世帯数	3,468 世帯
	清水区	67.5%	住民基本台帳世帯数	4,609 世帯



蒲原地区コメント

- ・人口は減少傾向を示し、世帯数は増減を繰り返す傾向にあります。世帯人数が減少していることから、単身世帯や小家族化が進んでいるようです。
- ・人口減少地区は町内全てに見られますが、令和元年から 40 歳から 64 歳の割合は増加傾向が見られます。
- ・令和 6 年の 65 歳以上を 1 人支える生産年齢(15 歳から 64 歳)が市の 1.9 人より少ない 1.5 人で、若い世代の地区や自治会活動等への負担が増えることが見込まれます。
- ・さらに、自治会の加入率は区の値 68%より高い 75%ですが、年々減少傾向が見られます。

蒲原地区

地名のゆかり

蒲原の地は、縄文時代初期のころから台地に人々が集落を形成し、居住していたものと推定され、多くの遺跡が発見されています。有史以後における蒲原郷は、承平元年（927）に出版された「和名類聚抄(わみょうるいじゅしょう)」に地名が初見され、庵原郡6郷（安倍有度から富士川までの、西奈、大井、河奈、庵原、興津、蒲原）の宿駅として開かれたと記されており、蒲が一面に繁茂していたため、その名が生まれたともいわれています。

当時、現在の富士川を挟んで広く蒲原郷といわれましたが、鎌倉期に入り、富士川右岸 一帯を蒲原宿というようになりました。鎌倉幕府創設により東西交通の要地となり、戦国時代には今川、武田、北条氏の軍略的、地理的に重要な接点としていくたびか戦火を浴びました。その後、江戸時代に入り東海道の宿駅として繁栄してきました。

蒲原宿

東海道を江戸から西へ、日本橋から数えて15番目の宿場町が蒲原宿で、東木戸（諏訪神社の下）から西木戸（富士屋マートの西側）まで約1.2キロあります。ここにはもともと、天正10年（1582）に徳川家康がつくらせた「蒲原御殿」があり、寛永11年（1634）に3代将軍家光が京都上洛時まで使われていました。元禄12年（1699）以前、蒲原宿はここより200mほど南側、現在「古屋敷(ふるやしき)」と呼ばれている所でしたが、元禄12年8月15日の暴風雨による津波の被害により、宿場の大半が流出し、翌年から蒲原御殿のあった位置が宿場となり現在にいたっています。

蒲原城跡と北条新三郎

地元では「城山(しろやま)」と呼ばれている、室町時代に今川氏によって築かれた峰式の山城。永禄12年（1569）に北条新三郎と武田信玄との間で駿河攻防をかけた激しい戦い（蒲原城の戦い）があったことで知られています。駿府を侵略するため「蒲原城」の明け渡しを要求する武田軍に、北条新三郎は必死に抵抗しましたが、丸1日戦った末に城から逃れ、常楽寺（諏訪町）で自害しました。亡骸は北条の手により運ばれ、三島市にある祐泉寺に手厚く葬られています。城跡を含め周辺にはこの戦いにちなんだ旧跡がいくつか残されています。

南曲輪(くるわ)には「蒲原城址」の石碑と北条新三郎とその家臣を奉った城山八幡宮があり、北曲輪（善福寺曲輪）は物見台(ものみだい)等が再現されています。南曲輪からの駿河湾、反対側へ向くと富士山の眺望がすばらしく、また春には城山八幡宮の周りに植栽されている桜が开花し、隠れた桜の名所として親しまれています。

浄瑠璃姫の碑

明治31年（1898）に蒲原町初代町長であった五十嵐重兵衛によって建立された石碑です。この石碑には次のような話が刻まれています。「むかし、矢矧宿にいた浄瑠璃姫は、判官殿（義経）を恋い慕い、陸奥の国へ下る義経の後を追いました。この吹き上げの浜へやっとの思いでたどり着きましたが、疲れ果てて死んでしまいました。里人は姫の死を哀れみ、姫のなきがらを丁寧に葬り、塚の印に6本の松を植えておきました。」また、「語り継ぎ 言い継ぎぎつつ 今になお いくりの人の 袖をぬらすらん」との作者不詳の歌も刻まれています。



吹上の六本松

浄瑠璃姫の墓の西隣に、吹上の六本松があります。この松は浄瑠璃姫を葬った塚の上に目印として植えられたと伝えられています。

蒲原城の戦いで勝利した武田軍が勝ち鬨をあげたことでも有名です。

場所柄、富士川を渡航する際の目標等、交通の重要な目印としての役割をもはたしており、数々の古文書に「吹上の六本松」の名前が出てきます。

なお、現在は蒲原中学校の正門前にある「新栄公園」と一体化したように整備されています。

田中光顕と青山荘

蒲原地区中の代表的な建物である青山荘は、明治時代に宮内大臣まで務めた田中光顕伯爵の別荘です。青山荘は外から見てもわかる真っ白な洋館、宝珠荘を中心に様々な建物が京都の宮大工によって建てられ、素晴らしい日本庭園が広がっています。

この青山荘を建てた田中伯は明治の政界の実力者で、晩年の21年間をここ蒲原で過ごされました。田中伯は日本軽金属蒲原工場ができる際、アルミニウムの必要性を説明し工場設立に貢献されたほか、「福羽(ふくば)苺」という品種の苺を蒲原に紹介して蒲原の発展を望まれたなど、蒲原にとっても縁のある方でした。現在、青山荘は日本軽金属㈱の所有となっていて、社用に使用されています。

「浄瑠璃姫と源義経の非恋伝説」

蒲原に伝わる源義経と浄瑠璃姫のお話です。

牛若丸が元服し、名前を源義経と改めた後、金売り吉次の案内で奥州へ下る時、三河国矢矧宿（現在の愛知県岡崎市）のさる長者の屋敷へ宿を取りました。

その夜のこと、長者の娘である浄瑠璃姫が琴を奏でているとき、この音に感じ入った義経は自らも横笛をとり奏で始め、月夜に互いの音は溶け合いながら朗々と響きあいました。思いを募らせた二人は、契りを交わしました。

その後、義経は再び奥州へ向けて出発しましたが、蒲原にたどりついたとき重い病に倒れてしまいます。吉次はしかたなしに宿の主人に義経を預け、奥州へ旅立ちました。病気を恐れた宿の主人は吹上の六本松に小屋を建て、ここへ義経を移しました。義経の病はますます重くなり、その様子をうかがっていた盗人が、義経の持っている太刀や笛等を狙って襲ってきました。その時、太刀が自らの魔力で大蛇に化けて盗人を追い払いました。源氏の氏神八幡神はこのことを哀れみ、義経から手紙を預かり浄瑠璃姫に託けました。手紙を読んだ姫は仏に祈り、その霊験を受けて、義経のもとに向かいました。蒲原にたどりついた時、半ば砂に埋もれた瀕死の義経の様子を見て、悲しんだ姫がすがって泣いたそのとき、姫の涙が義経の口に流れ込み、息を吹き返しました。

しかし、その後源氏再興のため、二人は泣く泣く別れました。

浄瑠璃姫のその後の話については、異なる伝承が伝わっております。

「矢矧宿にもどったが、その後も思いが募り、再度後を追ったが、蒲原へたどり着いた時、疲れ果てて亡くなった」、「前途をはかなみ富士川に身を投げ、哀れに思った里人がながきを丁重に葬った」、「そのまま蒲原に残り住み、義経の娘を生んだ後、生涯を終えた」と様々な説話が伝えられています。